

安田理深

「願生論」講義録について

本号より安田理深先生の講義録「願生論」を掲載することとなりました。その概要・経緯について報告いたします。

安田先生は、昭和三六（一九六一）年度から昭和四一（一九六六）年度まで大谷大学文学部において真宗学講義を担当されました。一九六一年は親鸞聖人七百年の八月には、安田先生が生涯の師と仰がれた曾我量深先生が大谷大学の学長に就任されています。安田先生はその四月に大谷大学の非常勤講師になられました。翌年、文学部講師となられ一九六六年三月に定年退職されていますが、その後、一九六七年に結核で入院されるまで講義を担当され、この間、「願生」を主題とする講義を行っておられます。

講義の題目は、最初の二年間は「願生浄土」、その後の四年間は「願生論」です。安田先生は六年間にわたり「願生」という一貫したテーマを、毎年新しい課題のもとに講義されました。（加来雄之「安田理深 昭和三十六年度講義「願生論」

ノート」翻刻）『真宗総合研究所研究紀要』二

四号「解説」参照

この講義のために、先生自身が作成された自筆ノートが五冊残されています（相応学舎蔵）。また、講義の録音テープは昭和三八（一九六三）年度と昭和四一（一九六六）年度のものが確認されています（大谷大学蔵）。

この度、掲載するのは昭和三八（一九六三）年度の講義録です。まだ貴重であった録音テープによる記録が残されたのは、当時、真宗学研究室におられた広瀬泉・伊東慧明の両氏が、私費を投じて近代真宗学の先輩の記録を残そうとしてくださったことによります。その録音テープは神戸和磨氏が保管されており、二〇〇五年度の大谷大学真宗総合研究所一般研究「安田理深「願生論」の研究」の資料収集において確認され、広瀬・伊東両氏の了解を得て、真宗学会の援助によりデジタルデータ化されました。

昭和三八年年度の講義のために作成された自筆ノートでは、内題が「願生論」となっており、また、前期と後期のテーマが次のように記されています。

1. 自覚 Das Erwachen

aus einem wahn erwachen

2. 言葉 Die Sprache

ノートの巻末には、試験問題が次のように記されています。

名号の教学的意義について 昭和三十八年度レポート目

安田先生が真宗仏教における教学的主題としての「願生」を、「自覚」と「言葉」という視点から講義されたことを知ることができます。講義の骨格はノートに記された主題にそっていますが、実際になされた講義の内容は自由闊達に展開しています。

今号からの掲載の間、「入出二門の源泉」の題で連載していました『入出二門偈』の講義録は休載いたしました。『入出二門偈』の会を主催された岐阜慈光会の森智誠氏には休載についてご快諾をいただきましたこと、厚くお礼申しあげます。（大谷大学真宗学会 親鸞教学編集部）